



謹 賀 新 年

社団法人 日本測量協会

関西支部長 宮 井 宏

新年明けましておめでとうございます。

昨年は東日本でM9地震と津波による大災害が発生しました。いつかは分かりませんが、つぎは西日本といわれています。地震や津波の対策は行政機関でやって頂くことが基本ではありますが、いくら時間と金をかけたとしてもこれで完璧ということはありません。ですから一人一人の「自分の身は自分で守る」という心構えの育成と自分の置かれた立場、境遇、状態に応じて臨機応変の対応がとれるよう不断のイメージトレーニングを怠らないといった「究極の災害対策」の重要性については未来永劫変わることはないでしょう。

『東日本大震災の教訓—津波から助かった人の話』*を読みますと、そこには明治三陸津波の言い伝えの御蔭で助かった話、チリ地震津波の記憶に頼ったために命を失った話、巨大な防潮堤を信頼したばかりに命を失った話、生き抜く意欲と咄嗟の機転が身を助けた話など、沢山の貴重な経験談が盛り込まれています。東日本大震災に限らずこうした大災害での経験談は「究極の災害対策」をイメージする上で大きな助けになります。

そこでつぎに大阪湾での津波経験談を紹介してみましょう。一つは大阪環状線大正駅近くの本津川畔に立つ碑文「大地震両川口津浪記」です。もう一つは堺の大浜公園（もとは高台の神社）に立つ碑文「擁護爾（辞の意か）」です。両碑文とも1854年12月23日（嘉永7年（安政元年）11月4日）に起きた安政東海地震とその翌日の12月24日に起きた安政南海地震による津波の経験を記したものです。

一つ目の経験談は「12月24日夕方大地震が発生し、家々は崩れ落ち、火災が起った。その恐ろしい様子がおさまったところ、大きな津波が押し寄せ、東堀まで約1.2メートルの深さの泥水が逆流してきた。安治川や木津川の橋はすべて崩れ落ちた。船は横転し、川筋にはあっという間に壊れた

舟の山ができた。地震がきても水の上なら安心だと小舟に避難していた人々や、川岸に作った小屋に避難していた人々など、多数の人が犠牲になった。宝永の大地震（147年前の1707年）の時も、小舟に避難したために津波で水死した人が多かったと聞いているが、伝え聞く人がほとんどいなかったため、今また多数の犠牲を出してしまった。ここに記録しておくので、心ある人は伝えていてほしい。」**というものです。

二つ目の経験談は「12月23日、24日と強い地震が2日続いた。その後、急に津波が起り、川岸に繋いでいた舟はすべて綱が切れてぶつかり合っ壊れ、橋が八つも落ちた。地震や津波で家はつぶれ、土蔵は傾いた。津波の恐ろしさは言いようもない。しかし、かつて宝永年間にあった同じような地震と津波でも舟に避難して命を落とした人が多かったことを言い伝えてきた近隣の住民は、神社の広い境内に避難して、けが人は一人もいなかった。他所の海岸や川筋では、地震を避けるために小舟で川に避難したところに、津波で流された大きな舟がぶつかり、亡くなった人が無数にいたそう。強い地震のときは、決して川舟に避難してはいけない。地震が強いときは津波があると知っておく必要がある。」**というものです。

これら二つの経験談は今でもその有用性を失っていないように思うのですがいかがでしょうか。

最後に、これらの経験談に登場する宝永、安政地震はM8.4とされていますから、現在西日本に残る経験談はすべてM9よりかなり小さい地震のものばかりだということになります。したがってこれらの経験談は全て最新の科学的知見により補正する必要があるということに注意が必要です。

*『東日本大震災の教訓—津波から助かった人の話』
村井俊治著

** 大阪府西大阪治水事務所津波・高潮ステーション
資料による